

# 図書館だより

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

## 若き白秋の詩に

# 曲をつけた北の作曲家

青春が花であった時代を横目に、  
 明治45年、春。  
 若き作曲家が東京音楽学校を巣立った。  
 一人は中山晋平。25歳。  
 もう一人は札幌出身で、  
 吉丸一昌宅の書生をしていた、  
 梁田貞。27歳だった。  
 二人とも音楽家としては遅咲きであった。  
 大正2年。  
 島村抱月は芸術座を結成。  
 その年の音楽会で、  
 白秋の詩、  
 「城ヶ島の雨」に曲をつけたのは  
 梁田貞だった。  
 他方、中山晋平は  
 「カチューシャの歌」、次いで  
 「ゴンドラの歌」を作曲、大ヒットした。  
 この二人は、彼等二人は良きライバルとして後の  
 童謡運動の担い手として成長して行く。  
 吉丸一昌が旧制中学の教師から  
 東京音楽学校教授となった年、  
 明治41(1908)年に  
 彼ら二人は入学した。  
 晋平は島村抱月の書生だったが、  
 吉丸一昌の陶薫は受けたはずだ。  
 梁田貞の方は「ドングリコロコロ」で  
 知られる碑が創成小学校に建てられている。

青春が花であった時代横目に  
**音楽学校を巣立った二人のライバル**

## 書彩声彩

### 童、夢みし

—「早春賦」と  
 その時代  
 (最終回)

### 少年の日ははるかな記憶

菜の花島に  
 入り薄れ  
 見わたす山の端  
 霞ふかし。  
 『尋常小学唱歌』(六)  
 (大3・6)

■ p.1. 書彩声彩 童、夢みし—「早春賦」とその時代(最終回) ■ p.2.-5. 春の野に出でて若菜摘む

■ p.6.-7. 書彩声彩(続) ■ p.8. 2001年春 いまだ冬の空



春の野に出でて  
若菜摘む①

## 夢風草

1749      1809      1821      1830      1832      1847

ゲーテ生る

メンデルスゾーン生る

11月  
メンデルスゾーン(12)  
ワイマールにゲーテ(72)を訪問

5月  
メンデルスゾーン(21)  
ワイマールにゲーテ(81)を訪問

ゲーテ没(83)  
(3月22日)

メンデルスゾーン没(39)  
(11月4日)

## ▶ ゲーテ的生涯

フランクフルトで少年時代を暮したゲーテにとって、

忘れられない人形劇があった。

「ファウスト物語」である。

この中には、悪魔のメフィストとの約束を果たすために、ユダヤ人から金を借りて返す場面がある。

ゲーテは、のちに書いた『ファウスト』の中では、この挿話を削除した。

それはともかく、

ゲーテは、この不思議な物語の世界のとりこになって、生涯をかけて、

『ファウスト』を書き継いで行く。

その間、実に60年余。

晩年、完成に近づきつつあった

ゲーテを若い音楽家が訪ねて来た。

その名をフェリックス・メンデルスゾーンと言った。

彼は豊かなユダヤ人銀行家の息子であり、その祖父は、モーツァルトが愛読した哲学者、モーゼス・メンデルスゾーンであった。

後年、メンデルスゾーンは、

イギリスの金融王、ネイサン・ロスチャイルド家の姫たちの音楽教師として、ロンドンに渡った。

## ◀ 晩年に訪れた メンデルスゾーン

それはゲーテが80歳の年、温いそよ風の吹く5月のワイマール。

フェリックスは来る日も来る日も、

ゲーテのためにピアノを弾いた。

ベートーベン、モーツァルト、シューベルトを弾いたが、大半はバッハだった。

帰るといふフェリックスを今日一日、今日一日と引き延ばして行った。

ゲーテはユダヤ人だったフェリックスに偏見は持たなかった。

後にフェリックスはゲーテを「ワイマールの太陽」と言った。

しかし、別れの時が来た時、

ゲーテは『ファウスト』の草稿の一枚を取って、その余白に

「私の親愛なる若き友F・M・B、

力強く優しきピアノの大家へ、

—1830年の楽しき5月の日々の思い出として

J・W・フォン・ゲーテ」

と記した。

ゲーテの生涯は『ファウスト』をタテ糸とし、

音楽をヨコ糸とした生涯であった。



1828 1910 1913 1930 1938 1979 2001

トルストイ生る

トルストイ没  
(11月20日)

熊本県に生る  
北御門二郎氏

東大英文科へ進学するもハル  
ピンへ  
北御門二郎(17)

徴兵拒否の行動、農作業の生  
活へ  
北御門二郎(25)

東海大学出版会より刊行  
トルストイ3部作  
北御門二郎(66)

トルストイ3部作を改訂出版  
北御門二郎(88)

春の野に出で  
若菜摘む②

虫織草

## トルストイ的生涯

Comme il ne faut pas 人生 (うまく立ちまわらない)

その勇士をロシアの草原に現わしたのは1912年の秋、

ロシアにはもう冬が近づいていた。

天才的戦略家ナポレオンですら敗ることの出来なかった厳寒。

モスクワを前にした、ボロジノでの戦闘は、これまでに見たことのないようなロシア軍の抵抗にあって、さしものナポレオンすら、手つかずの近衛師団を投入しなければならないハメに落ちていた。

双方が深傷を負った獣のごとく、モスクワへとなだれこむ。

一人の青年がそのナポレオンを暗殺しようと企むものの逆に捕えられて、銃殺現場に引き出される。そこには捕虜が立ち、一人ずつ、銃殺されて行く、いよいよ青年の番だと思った一瞬、命令は、「撤去」だった。

「救われた」と思った。

彼は付き添いとして扱われていた。

何故に、

その高貴な身分の故に。

『戦争と平和』の主人公、

ピエールは、母を知らない私生児として、莫大な

財産を相続した。そんな彼を社交界の令嬢たちは「あの方、すてきな方ね、

性を超越していらっしゃるのね」

(Il est charmeut )  
(Il n'a pas de sex)

と言うのだった。

この下りを大家たちは

「性を持っていらっしゃらないのね」

と表現して来たが、

球磨の人、北御門二郎氏は

前述のように翻訳する。

彼、北御門二郎氏は今、88歳でありながらなど、

トルストイ三部作と取り組む。

すでに、1979年に東海大学出版会から初版の「三部作」を訳出していた。

東大英文科へ進んだが、トルストイを原典で読むためにハルピンへ。二度と大学にも戻らなかった。

25歳の1938年、彼は徴兵を拒否して逃避行。すぐ戻されて出頭した。係官は「兵役を免ずる」と言った。その瞬間、あのピエールのように安どの心が胸をよぎる。「ワー」と泣いたという。トルストイを虹と見た人生がここにある。



春の野に出でて  
若菜摘む③

## 貴香草

明11 1878	明24 1891	明31 1898	大12 1923	昭15 1940	昭16 1941	昭20 1945	昭48 1973
有島武郎生る	近衛文麿生る	近衛秀麿生る	軽井沢別荘で自殺 有島武郎(45)	近衛文麿 第三次首班	太平洋戦争突入	軽井沢別荘で自殺 近衛文麿(54)	近衛秀麿没(75)

## 文磨的生涯 — 華麗にも、先を読みすぎた悲劇

45歳の有島武郎が自殺したのは、軽井沢の別荘。その有島家と近かったのは近衛家である。政治家、近衛文麿が自殺したのも又、軽井沢の別荘だった。

『軽井沢別荘史』(穴戸實、住まいの図書館出版局、1987年)によれば、有島家ゆかりの「三笠ホテル」での晚餐の風景を撮った写真がある。

そこには若き日の近衛文麿を中心に里見弴、有島生馬らの顔がみえる。

有島武郎の妹、愛子は、少壮実業家、山本直良と結婚。

二人が「三笠ホテル」を開業したのは1906(明治39年)のことである。

この建物は、軽井沢別荘史に新しい一ページを開くことになる。

大正5年には、「早春賦」の作詞者、吉丸一昌の師、東大教授芳賀矢一氏の別荘が建てられている。

近衛文麿には軽井沢が似合う。その上品な顔立ちと身のこなしは、上流社会そのものの姿であり、軽井沢は、その遠景であったろう。

彼の人生も又華麗だった、

東大を出て、政治家を志し、日中戦争の波にのって階段を上りつめて行く。

太平洋戦争前夜の首相は彼であった。

ゾルゲ事件では、側近尾崎秀樹を切りすてて、自身は無傷。

戦後は、マッカーサーの意を読んで、彼自身の筆になる「憲法草案」を提起、生き残りをかけた。その器用さがアダとなる。

「草案」の中に「天皇退位」の文字があった。

マッカーサーはその上を行った。

「天皇擁護」。つまり「象徴としての天皇説」であった。

逮捕状が軽井沢に届いた。

「帰ってはこれない」

彼は自殺の道を選択した。

その判断はあまりにも先を読みすぎた判断だったろう。

弟、秀麿は「チンチン千鳥」で知られる音楽家。

東京音楽学校卒ではないものの

山田耕作に作曲を学ぶ。

兄とは対照的な生き方だった。



明治元 1867	明18 1885	明35 1902	明36 1903	明40 1907	大 5 1916	昭60 1985
漱石生る 子規生る	野上弥生子 大分県白杵に生る	子規没(35)	漱石(36)英国留学から帰国	社 漱石(40)東大を去り朝日新聞入	漱石没(49)	野上弥生子没(100)



## 漱石的生涯 反骨を貫らぬいた志士の作家

「新聞屋が商売ならば、  
大学屋も商売である。  
商売でなければ、  
教授や博士になりたがる必要はなかろう。  
月俸を上げて貰う必要はなかろう。  
勅任になる必要はなかろう。」

こう書いて、  
漱石は東大を去った。  
明治40年(1907)3月のことである。  
それは文豪漱石の旅立ちだった。

この決意はどこから来るのか？  
それは漱石の友、正岡子規が、  
あたかもホトトギスが血を吐くかのように書いた、「ホトトギス」の1900年新年号の中にある。

「大いなる田舎者たち」が政治を創り変えた。薩長土肥の九州-四国人。  
ロンドンで読んだ漱石も又、  
帰国の船上で、決断する。  
蒼海を見てのことであろう。

雄々しくつぶやいた。  
「文士は、いやしくも、  
勤皇の志士のごとくあらねばならない。  
オレはこれまで、松山だ、熊本だのといっちは逃げまわった。しかし、もう逃げはせん。  
人間を押すんだ。権威を捨てるんだ！」

漱石のいう「自己本位」とは「他者による眼の評価」ではない「自分の眼による自分の評価」である。  
それはだれも行くことのない己れの道に行く決意である。

子規によって漱石は甦える。  
その周辺に大勢の弟子たちが集った。  
いわく、科学者、寺田寅彦、いわく、後の東大総長、野上豊一郎、いわく、学習院大学総長、小宮豊隆。いわく、鈴木三重吉、いわく、森田草平。  
豊一郎の夫人であった、野上弥生子は、漱石の人生を送った。「早春賦」の作詞者、一昌も又、多くの作曲家を育てたという意味で漱石に通じるものがある。

一昌は43歳、漱石は49歳で大正5年、この世を去った。



くわをかつぎ  
菜の花の沖に  
見た  
朧月夜

明元 1867	明6 1873	明11 1878	明18 1885	明20 1887	明41 1908
漱石生る 芳賀矢一(後、東大教授)福井に生る	吉丸一昌 大分県臼杵に生る	岡野貞一、 島根県に生る	北原白秋、福岡県柳川に生る 梁田貞、札幌に生る	中山晋平 長野県に生る	吉丸一昌(35)東京音楽学校教授 となる 中山晋平(21)、梁田貞(23) 東京音楽学校に入学 晋平は島村抱月宅、梁田は吉丸宅へ、書生として入る

小京都と言えば、  
秋田県の角館、  
山口県の萩が知られるが、大分県の臼杵を挙げる  
人は少ないだろう。  
その小京都に、  
吉丸一昌は生れた。  
臼杵が一度、歴史上に現われた日が一日ある。  
明治10年5月。  
西郷軍が熊本から落ちて人吉を通り臼杵へと侵入  
して来た。  
城下は血の海だった。  
父、角内も出陣したが無事だった。  
吉丸家の菩提寺、龍源寺は焼失したものの「三重  
の塔」は残った。  
臼杵は寺の多い街だ。  
祇園という地名もある。  
この地で、わが吉丸一昌は生れ育った。  
下級武士だった家の暮らしは維新後、一層困窮す  
る。  
父は、畑を山ぞいに拓いていった。  
刀をくわやすきと変えて働いた。

吉丸少年も手伝う日々が続く。  
遠くに海が見えた。  
菜の花が咲く。  
月が出る、夕暮の帰路に鳴る鐘を聴いた。  
これまで高野辰之作とされて来た『朧月夜』は吉  
丸一昌の作風を伝えてやまないように思える。

へ菜の花畑に  
入り日うすれ  
見渡す山の端……

こうした苦しい少年時代の日々の体験が東大に進  
学したあとも又、貧しい学生の生活を援助する下  
地になった。  
「修養塾」で、あるいは「吉丸家」で梁田貞も又そ  
の一人であった。  
一昌は夜は道場に通った。  
遠く学生を引率しての音楽会の旅行。  
深夜行の連続だった。  
文武両道にたけた吉丸の体は疲れていた。



明45=大1 1912	大2 1913	大3 1914	大4 1915	大5 1916
中山晋平(25)、梁田貞(27)、共に東京音楽学校卒業。	島村抱月「芸術庵」結成 記念音楽会で、白秋(28)の「城ヶ島の雨」に作曲した梁田貞(28)自身の独唱。	岡野貞一(35)作曲の「故郷」「朧月夜」載る 『尋常小学校唱歌(六)』	「芸術座」の劇中歌「カチュウシヤ」に中山晋平(27)作曲。好評を得る。	吉丸一昌(43)没 恩師、東大教授芳賀矢一氏(49)「文武両道の人」と追悼 「芸術座」の劇中歌「ゴンドラの唄」に中山晋平(28)作曲。大ヒットする。

# 朝に筆、夕に剣 駆けぬけた 文の林

そんな吉丸一昌に批判的な人々がいた。

上野の駅で買った週刊誌に、吉丸一昌を中傷する記事があった。

同行していた同僚の作曲家島崎赤太郎と岡野貞一は「こんなひどいことがあるもんか!」と吉丸を気づかった。

大正2年に発表された「早春賦」はこのような逆風の時代の彼の心境を現わしてはいまいか。

島崎赤太郎とは、よく、依頼されて、校歌を作った。

長野県大町高校の校歌、

静岡県静岡高校の校歌

は、いずれも気品にあふれたものだ。

一部、皇国讃美が挿入されているが、それは一つの時代の流れの中の出来ごとにすぎない。なんら、吉丸の作風を傷つけるものではないだろう。

岡野貞一は、これまで考えられていた以上に、つまりそれが本稿の初期の仮説ではあったのだろう

高野辰之—岡野貞一というコンビが強固という仮説は、郷土史家、吉田稔氏の論述を見るとくつがえされてしまう。

結婚式の仲人を務めたのは、高野辰之ではなく、吉丸一昌であった。

「故郷」「朧月夜」の作曲者、岡野貞一は、クリスチャンであり、苦学した音楽家であったから、吉丸一昌の生い立ちと似ていた。

高野辰之とされて来たこの二つの名歌はその作曲が岡野貞一とあれば、逆に作詞が吉丸一昌であったとしても不思議はないわけだ。

前述の吉田稔氏の著書の中にこれまで作者不詳の「文部省唱歌」とされて来た「四季の雨」が吉丸一昌のものとしてされている。

その作風は「故郷」「朧月夜」と合致するように見える。

大正5年3月7日、吉丸急逝。

彼の死を最も惜しんだのは、彼の師東京帝国大学教授芳賀矢一氏であったろう。



# 日本人であることの愚

2001 年が開けた。  
そこにどんな光景があったろう。  
人々が心底喜びあえるような光景はなかった。  
盗み、殺しは毎日の報である。  
国家の借金は 1 日億単位で増えている。  
政治家の汚職は日常の事。  
官僚がそれに右ならえするのは訳ないだろう。  
そんな光景の中に光明があるとすれば、長野県知事田中康雄氏の言動だろう。  
もう 30 年も前に「クリスタル」とかで有名になった作家だそうだが、  
初めは何をするのかと傍観していたが、どうして、  
立派なものである。  
暗闇の中に一条の光を見たと思った  
住民との膝ずめ談話。  
公共事業の現場へのヘルメット姿。  
活動的だ。行動派だ。

何よりもそこに、若さとスピードを感じる。  
政治家や役人のようにたらい回しなどはない。即決なのである。  
作家がどうしてそういうことが出来るのか。  
不思議である。  
「脱公共事業宣言」  
これこそ、我々が待ち望んでいたものだ。  
本当に必要なものは、都心に安い公共住宅を創り、  
山に木を植えることである。  
あの鉄路に飛びこんで、酔人を助けようとした韓  
国人留学生の死はなんとも悼ましい。無念としか  
言いようがない。他国の若人を死なせた日本人と  
は一体、何物なのか。我々は一体何をしているの  
か。  
漱石が言ったように亡ぶだけなのか。  
それにしても厳しい冬だった。  
その冬は、「早春賦」のようにまだ終わっていない。

## 図書館の動静

### ホームページのご案内

◎図書館のホームページを開設いたしました。

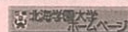
内容は、お知らせ、蔵書検索、学内関連機関案内、利用案内、施設案内、カレンダー、リンク集などです。多くの方のご利用をお待ちしております。

下記の URL にアクセスをお願いいたします。

<http://library.hokkai-s-u.ac.jp/>



- |       |      |        |
|-------|------|--------|
| お知らせ  | 蔵書検索 | 学内関連機関 |
| 利用案内  | 施設案内 | カレンダー  |
| 学外の方へ | リンク集 | お問合せ   |



北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.22 No.4 (通巻 156 号)

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南 26 条西 11 丁目  
☎(011)841-1161 本館内線 270-275・279・129 工学部内線 813・814 印刷所: ㈱アイワード